



／ 北区撮り歩き ／

光の流れが断えない

今秋に全線開通する札幌新道

最初は「けものみち」だった。クマ、エゾシカたちがわがもの顔で歩き回ってつけた道。やがて川に沿って人間が道を作った。鹿道をたどった石狩旧道、今の「道道茅戸札幌線」が区内で一番古い道路であろう。道路とは言っても密林中に小道があるだけで、クマやオオカミの出没が絶えなかったという。

明治初期、交通の主流は水路だった。大友堀、創成川、伏龍川が当時のメインストリート。丸木舟やいかだがゆつくりと行き交う、のどかな「水郷北区」であった。

創成川に並んで茅戸新道、今の石狩街道が開通。街道と言っても運河を掘った土を盛り上げてあるだけ。馬が腹まで泥水につかるようでは船と勝負にならなかった。水運は明治末まで全盛を誇る。しかし、水路には大きな欠陥があった。冬の結氷である。やがて主役は馬車、鉄道へと変わって行った。

そして今は車である。望むときに、すばやく、そして自由に移動できる交通機関は昔からの夢であった。それだけに車の王座は揺るぎそうにない。

区内で車の道の代表を探してみた。片側二車線の札幌新道であろう。西区宮の沢から区内を通り、豊平区平岡までの二十一キロメートル。市内の混雑を緩和する新しい道を計画的に作る。と昭和四十三年に着工、今秋には全線開通の予定である。新道には夜になってもひっきりなしに車が走っている。絶えることのない光の流れは現代の象徴でもあろう。

しかし、船、馬車と同じように車も事故、公害という問題を抱えている。やがて車の道も曲がり角に来るかもしれない。